

蕪村の手紙（序論）

與謝蕪村の手紙については、以前からゆつくり読んでみたいと思つてゐた。私が初めて蕪村の手紙を眼にしたのは、今から三十數年前、修士論文で蕪村の繪畫を取り上げた頃のことである。その頃はあくまでも蕪村繪畫の參考資料といふことで、蕪村の手紙そのものに興味をいだくことはなかつた。その後私は奈良の美術館に就職したのであつたが、やがてそこで蕪村歿後二百年を記念して特別展を開催することになり、その企畫と準備に参加する好運を得たのであつた。その折に圖録の文献資料篇のために改めて集英社版「蕪村集」の書簡篇を通讀したのであるが、その時初めて蕪村といふ人は何と面白い手紙を書く人かと思つたのであつた。しかしその時は圖録の參考資料作りを優先し、その面白さの探究は後回しにしてしまつた。いま思ふと、その頃の私には蕪村の手紙の意味合がまだ判然としてゐなかつたのであらう。ところがその後も蕪村の繪畫や俳諧

の魅力を追ひかける内に、その魅力の秘密が蕪村の手紙の内に秘められてゐるやうに思へてきたのである。そこで今度は繪畫や俳諧の資料としてではなく、蕪村といふ精神の生きた姿として、手紙そのものを味讀してみたいと思ふやうになつたのである。

傳存する蕪村の手紙の數は多く、集英社版の「蕪村集」には三百五十七通が集録されてゐる。その後も二十數通が発見され、今でも時をり未公表の手紙を骨董屋や京都近邊の舊家で見せられることがあるから、現在編輯中の講談社版「蕪村全集」の書簡篇には、四百通前後の手紙が集録されるのではなからうか。そのほとんどは明和七年（二七七〇）、蕪村五十五歳以降のものである。明和七年は蕪村が俳諧の師夜半亭巴人やはんてい ばじんの跡を繼いで、京都で夜半亭二世を襲名した年である。手紙の當先はほとんどが俳諧の門人あるいはその知人であり、その數は八十餘名にのぼる。手紙の内容は、その多くが普段

早川 聞多

の用事や句會の添削の應答であつて、そこに蕪村の俳論や畫論、また特別な主張を期待しても無駄である。蕪村の手紙の魅力は、その何氣ない文面と自在な書きぶりの内に、蕪村その人の如實な面影と蕪村の生きた精神の姿を読み取る作業の内に生まれてくるやうに思はれる。それが蕪村が半ば意識して自らの手紙において試みたことではなかつたか。さういふ豫感のもとに、蕪村の手紙を読んでみたいと思ふ。

○

さて早速蕪村の手紙に入りたいのであるが、どこから入つてゆくべきか、迷ふところである。年代順、相手別、事柄別といった方法が考へられるが、蕪村の手紙の魅力の特質を思ふならば、さうした整理された方法はこの際採り得ないのである。ここはどう展開するか判らないが、先づは私が最初に面白いと思つた手紙から読みはじめることにしよう。その手紙とは次のやうなものである。

御使殊の外またせ申候。其ゆゑは娘それがしにむかひ過言いたし、扱々にくき者と存候へども、骨肉の愛情ゆゑ異見眞最中、それにて使隙入此譯に候。晝は明日中にしたゝめ可申候。御好の琴の圖、大方こんなものにてよきや。(琴の略圖あり)
發句は

しぐるゝや鼠のわたる琴のうへ

此句可然候。但し

桐火桶無絃の琴の撫ごゝろ

節季ちかく候へば、何にても書遣し可申候。さだめし謝寶、車馬にて御おくり被下候はんとたのしみ申候。

先日御約束の奈良茶めし、いかゞ。老人のものわすれはさることなれども、貴子の如き若き人のものわすれ、近比きこえぬ事に候。禮は先日たんと言置たる事に候。禮をとりかへさんや。いかゞ。萬々。已上

二月廿八日

如瑟様

蕪村

何とも愉快な手紙ではないか。受け取つた如瑟も一讀思はず笑みを覺えたことであらう。如瑟なる人物については、蕪村晩年の俳諧の門人で、京都の人といふくらゐしか分かつてゐないが、文面から察するにかなり若年の門人であり、また師に琴の畫を依頼し奈良茶飯でも馳走しようといふからは、それ相應の有得の人であつたと思はれる。

如瑟の使ひの者がやつて來た時、蕪村は娘くのと口論の真つ最中だつた。しかも使ひの者を待たせての「異見」とあるから、蕪村もかなり本氣だつたやうである。書中の「桐火桶」の句の初見が天明二年(一七八二)暮れの手紙であるから、この手紙は天明三年二月の

ものと推定される。時に蕪村六十八歳、娘くのは二十歳を二つ三つ越えてゐたであらうか。くのは蕪村にとつて一人娘であり、七年前に三井みつあの料理人の家に嫁がせたものの、半年で蕪村自ら離縁させた娘である。その顛末については後に記すことにならうが、ここではその一人娘に對する蕪村の對應ぶりに注目したい。「扱々にくき者と存じ候へども、骨肉の愛情ゆゑの異見」といふ蕪村の書きぶりからみて、くのは過言は單なる子供の口應への類ではなかつたと思はれる。それは娘を脱した女の抗辯の類ではなかつたか。内容はどうかであれ、くのは口吻には一人前の女としての體臭の如きものが漂つてゐたのではなからうか。おそらく蕪村はそれをいち早く嗅ぎとり、それが蕪村を向きにさせたのであらう。しかしそれでもなほ、蕪村にとつてくのが自分の娘であることに變はりはなかつた。だからこそ言ひ争ひであつた。このやうにわが家の實情や不躰裁をぶち明けた文面は、蕪村の手紙の中ではあちこちでお目にかかる。それを俳人の曝露趣味と見做す向きもあるが、蕪村のこの書きつぶりには、俳人を氣取つた洒落つ氣なぞ感じられないだらう。實はかうした書きぶりこそ、常に己おのれの實情に沿ふことを心掛けた蕪村の表現法なのである。

返書が手間どつた事情を記した後、蕪村ははまだ昂奮さめやらぬ勢ひで用件に對する返事を一気に記す。如瑟は頼んでおいた琴の畫の進み具合を問ひ合はせて來たのである。彼が琴の畫を依頼したの

は、自らの俳號「如瑟」に因んでのことだつたらう。「瑟」とは大琴おほじこの意であり、夫婦相和の譬へとして「琴瑟相和す」といふ成句として熟してゐた。その琴の畫の讚に、蕪村が「しぐるゝや」の句を撰んだについては、さして深い配慮があつたとは思はれない。この句は十二年前、蕪村五十六歳の時のものである。手控への「自筆句帳」から適當に琴の句を撰んだといふところか。ところが「此句然るべく候」と書いた時點で、蕪村はふと我に返り、近作の句「桐火桶無絃の琴の撫ごゝろ」を思ひ出した。さういふ書きぶりである。さてこの句については、蕪村は次のやうな一文を遺してゐる。

桐火桶無絃の琴の撫ごゝろ

焦尾琴

此古事はもろこしにて竈かまどの下より燒残りたる桐をとり得て、琴につくりけるに、其音あやしく妙なりけるとぞ。琴のうしろのかた焦こけたるゆゑ名附たるとなり。陶淵明たうえんめい常に無絃の琴を撫ぶしてたのしびけるとぞ。

右二ツの古事をおもひ合せて書たる句也。

即ちこの句には琴にまつはる二つの故事、「焦尾琴」と陶淵明の「無絃琴」への思ひを重ね合はせてあるといふのである。「焦尾琴」とは後漢時代の儒者蔡邕さいいよにまつはる話で、ある人が炊事のために竈



圖一 松村月溪筆「蕪村翁圖」

に桐の木を焼べたところ、そのはぜる音を聞いた蔡邕がその良材であることを感知し、すぐさま竈の下からその桐を譲り受け、それで琴を作ったところ、豫期したとほりその琴が妙なる音を發した故、焦尾琴と名付けたといふ故事である。一方「無絃琴」の故事とは、東晋の詩人陶淵明は音律が不得手であつたが、絃の張つてない琴を

常に側に置き、酒を飲む際はその琴を撫でながら、心の耳で琴中の意趣を楽しんだといふものである。共にいかにも文人好みのお話である。陶淵明は蕪村が生涯敬愛した人物であり、蕪村といふ俳號も陶淵明の「歸去來辭」に由来すると言はれてゐるほどである。ならばこの「桐火桶」の句は、桐の火桶から焦尾琴を聯想しつつ、その桐を撫でてゐるうちに無絃の琴を愛撫する陶淵明の心境に思ひが至つたといふところであらうか。

さて桐火桶といへば、私は松村月溪が描いた師蕪村の肖像畫を思ひ出す(圖一)。そこには小ぶりの木白のやうな火桶に兩手をかざしながら、畳の上に開いた本に目をやる蕪村の姿が寫されてゐる。蕪村晩年の日常を描きとめた圖柄である。おそらくあの火桶がこの句の桐火桶なのだらう。

實は琴もまた、蕪村にとつては馴染み深い器物であつた。それは娘のくのが少時から熱心に稽古してゐた樂器だつたからである。かうした實状を重ね合はせながらこの句を眺めてゐると、一人黙然と火桶に手をかざす蕪村の裡に、様ざまな日常の「實情」と「故事」の觀念が交錯する幻影が浮かんでこないだらうか。

ところでこの句には、「琴心きんしんもありやと撫なる桐火桶」といふ別案がある。この別案の句から推測するならば、蕪村は桐火桶の胸を撫でながら、陶淵明の心境を確かに感得してゐたとは思へないのである。さらに言ふならば、陶淵明が無絃の琴を撫でて琴心を得たとい

ふ故實さへ、蕪村は本氣では信じてゐなかつたのではあるまいか。蕪村にとつて確かなことは、桐火桶を撫でる掌の感觸だけだつたに違ひなく、それだけが無絃の琴を愛した陶淵明に通じる確かな感覺だつたのではなからうか。そしてそこに浮かび上がってくるのは、尤もらしい故事を介した觀念的な陶淵明像を信じる蕪村ではなく、彼我のどうしやうもない隔たりを自覺しつつも、どうにか自らの實感に基づいた脈絡を得ようとする孤獨な精神の姿である。

そんな意味深長な句を示した直後、蕪村は手紙の調子を一變させ、本音と冗談が^な縋ひ交まぜになつた語り口になる。「節季ちかく候へば、何にても書き遣はし申すべく候」とは、當時の京都では各節句前に諸般の支払ひをまとめてする慣習があつたので、ここでは三月三日の雛の節句をさし、その節季拂ひのためなら何でも描きますよ、と言つてゐるのである。次の「謝寶」とは謝金、ここでは琴の畫に對する謝金のこと。それを「車馬にて御おくり下され候はんとたのしみ申し候」といふのは、無論若い門人に對する蕪村獨特の洒落である。おそらくこの一節を讀んだ如瑟は、悦んで一枚餘計に送る氣持になつたことであらう。この手紙を讀んでみると、兩者の間にはそれだけの關係が成り立つてゐたことが察せられる。それに如瑟が節句前に畫を依頼してきたのも、節季の迫つた蕪村家の窮状を察してのことであつたらう。如瑟のさうした無言の配慮も、蕪村はよく承知してゐたに違ひない。

若い門人のそんな氣遣ひに變な遠慮をするやうな蕪村ではない。手紙の最後には「約束の奈良茶飯」の件を持ち出し、如瑟を面白くかしくからかひながら、繰り返し念を押して手紙を終へる。最後の「いかがく、萬々」とは、「決して決して忘れてくれるな」といふ念押しである。それほど蕪村がこだはつた「奈良茶飯」といふのは、東大寺や興福寺の僧舎で工夫された變はり飯で、茶の煎じ汁に煎り黒豆・小豆・焼栗などを加へて炊きあげた飯のことである。これが市中で食されるやうになつたのは、『本朝食鑑』によると、明曆の大火（一六五七）の後、淺草金龍山門前の茶店で豆腐汁・煮豆などを添へて出したのが始まりといふ。やがてそれが江戸で流行し、その後京坂に擴まつたものらしい。おそらく當時の都會人にとつては、一種のもの珍しい喰ひ物だつたのだらう。

それにしても蕪村の執拗なまでの念の押しやうは尋常ではない。しかしそこに少しの嫌味も感じられない。それはその語り口が誠に輕妙でをかし味を含んでゐるからであり、行間に奈良茶飯に對する無邪氣な嗜好と如瑟に對する立場を越えた信賴感が溢れてゐるからである。おそらく如瑟は頬笑みながら早速奈良茶飯の手配をしたことであらう。如瑟にしてみれば、師からこんな手紙を受け取るのも秘かな楽しみだつたに違ひない。このやうに遠慮のない愉快な手紙が書けたのは、無論蕪村の人徳によるところが大きいであらうが、それを理解して楽しむことのできる資質が若い如瑟の内に備はつて

ゐたことも忘れてはなるまい。

○
如瑟が常に師の生活を慮つてゐたことは、如瑟當の別の手紙によつても知られる。五月五日の節句前には「あやめの御祝儀として方金一封」を、また夏の土用には「暑中御尋として見事之鮎」を贈つたりしてゐる。鮎といへば、これまた傑作な手紙が遺つてゐる。

追啓

酒一樽 (猪名) いな河の小鱼

右両品共に六月六日夕がた京着いたし候。神事之間に合かたじけなく 忝存候。しかしいな河(猪名)の魚ハ腐れたゞれ候而、臭氣甚しく、一向(後)やくに立たず、四ツ辻へすてさせ申候。捨てに行者鼻をふさぎ、兜かほを背そむけ候而持も出候。飛脚屋より持参り候男も、道くくさきにこまり候よし小言を申候。いか様炎熱之時節、所詮京迄は持がたく候。向後暑中に河うをなど御登せ被なれ成候義、御無用に御坐候。切角御親切にこゝろを御つくし被なれ成候而も、用に立不まう申候。其上駄賃つひえの費、彼是以無益之事に御坐候。御存意のほどは甚かたじけなく候。右之義申進候事いかゞに存候へ共、向後御心得のために御座候故、無遠慮申進候。以上

六月十九日

東瓦様

蕪村

これもまた何とも率直かつ愉快な文面ではないか。相手の東瓦はやはり俳諧の門人で、老橘井・清容舎などの別號を持ち、安永六年(二七七七)には師から紫狐庵しこあんの號を譲られてゐる。氏は山本、通稱を木綿屋庄左衛門といひ、當時坂上・小西につづく伊丹の大酒造家であつた。「酒一樽」とあるのはおそらく自家の清酒であり、「いな河の小鱼」とは時節柄猪名川名産の鮎であつたらう。彼もまた如瑟同様有得の門人であつた。

伊丹からの飛脚が京都に着いたのは六月六日の夕方、「神事之間に合ひかたじけなく存じ候」とあるから、この酒と鮎は祇園祭を配慮しての品だつたと思はれる。當時の祇園祭は六月六日の夕方から宵宮飾が行はれ、翌七日が山鉾巡行と御輿神行の日にあつてゐた。そして蕪村はその祇園祭の中心地である四條室町のすぐ南、烏丸佛光寺西入町に住んでゐたのであつた。當時は八日から十四日までを後の祭とし、十四日に再び山鉾と御輿の巡行を行ひ、十八日の御輿洗で祭の幕を閉ぢたといふ。手紙の日付が十九日になつてゐるところを見ると、身邊の祭の騒がしさがやうやく鎮まり、蕪村自身の氣分も靜まるのを待つて認められたものと察せられる。

それにしても、さすがの蕪村も「腐れた魚」についてはどう書いたものか困惑したことであらう。いくら氣が置けない門人とはいへ、相手は名立たる酒造家の主人である。それより何より、自分是非

とも食べさせたいといふ東瓦の氣持が、蕪村には手にとるやうに理解できたに違ひない。思案のすゑ、蕪村が記した文がこの追申である。その書きぶりは實に率直かつ意を盡くしたもので、しかも俳諧的表現を駆使して讀む者に笑ひさへ催させる。

最初に祝儀の品が祭に間に合つた禮を述べるとすぐ、「しかしいな河の魚は腐れたゞれ候て、臭氣甚しく、一向役に立たず、四ツ辻へすてさせ申し候」と、言ひにくい事を言ひ立ててゐる。單に事實の報告ならば「腐れてゐた」ですむところを、「臭氣甚しく」「一向役に立たず」とたたみ掛け、「四ツ辻へ捨てさせ」とまで言ひつゝの。無論これは東瓦への當付けではなく、表に負を重ねて裏に正を得んとする、俳諧的表現法の一つである。

さらに、四ツ辻へ捨てに行く「家人」を呼び出して「鼻をふさぎ顔を背け」させ、ついでに「飛脚屋の男」も登場させて「小言」まて言はせてゐる。このたたみ掛けには蕪村の率直さと俳趣が^な交ぜになつてをり、實際の情景を竝べ立ててゐるだけのやうに見えて、その描寫と口調にはそこはかない滑稽味が漂つてゐる。この一節を讀んで、當の東瓦も餘計な恐縮感を覺えずにすんだことであらう。その後蕪村の書きぶりは一轉し、委曲を盡くして「今後暑中に河魚など送ること御無用」と説く。そして最後に「右の義申し進じ候事いかゞに存じ候へ共、向後御心得のために御座候故、遠慮なく申し進じ候」と誤解のないことを願つて手紙を結んでゐる。この文面

を讀んだ東瓦に誤解する餘地などなかつたらう。さうしてこの「追啓」にこそ、蕪村の眞面目が如實に示されてゐると悟つたに違ひない。といふのも、この手紙の本文は削られてゐて、この「追啓」のみが一幅に爲立てられて傳はつてゐるからである。

それにしても鮎とは何と難しい魚であることか。蕪村には、

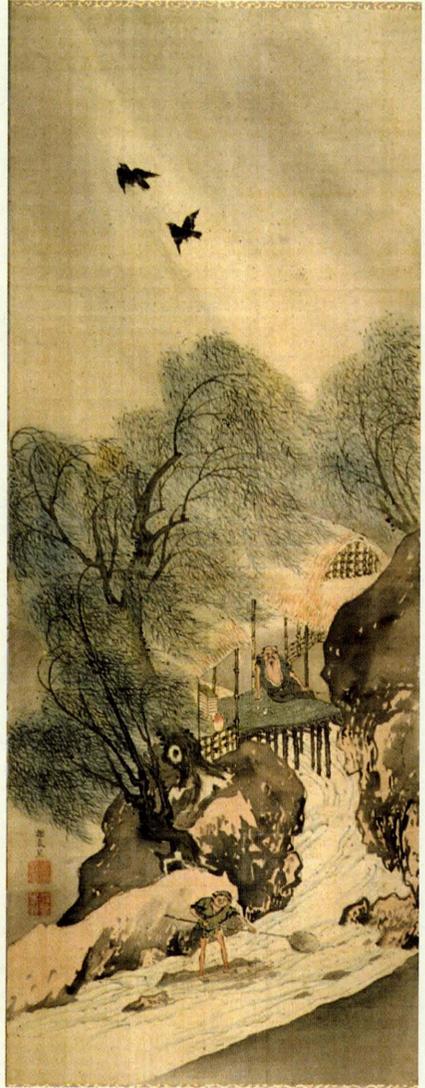
鮎くれてよらで過行夜半の門すきやくよははかど

といふ句があるが、これなども鮎のはかない鮮度についての了解があつて初めて味はへる句であらう。これが鯉や鮒なら「寄らで過ぎ行く」とはなるまい。今ならずぐに冷蔵庫にといふところだが、當時はどうしたのだらうか。この句が實際を詠んだものなら、蕪村のことである、夜更けにもかかはらず早速焼かせて一杯やつたのではあるまいか。

私の住む嵯峨の大堰川は古來鮎を名産としてきたが、江戸時代には毎年御所に數千尾を納めてゐたことが記録に見える。それは獻納ではなくお買上げであつたが、天保十四年（一八四三）に漁師仲間から御所まめなびどころへ差し出した口上書には、「御用弓張提燈壹張」を頂戴したいとの一條が見える。その日に捕つた鮎はその夜の内にといふことであらう。夏の夜、御用提燈を先頭に嵯峨野を御所へ急ぐ漁師一行の姿が目に見えよ。

蕪村と川魚といへば、蕪村畫の中のある圖柄を思ひ起こす。それは數ある蕪村畫の中でも有名な「四季山水圖」四幅對の内の夏景圖（圖二）で、一見すると山陰の溪流の傍らにたつ隠士の茅屋を描いた典型的な文人畫風の山水圖である。主の隠士は溪流に架けた床ゆかで涼をとつてゐる。虚空に薄墨が斜めに刷はかれてをり、突風を伴つて驟雨がやつて來たことを表してゐる。驟雨は崖の岩肌を濡らし、突風は岸の柳絲を吹き上げてゐる。そして叮嚀ていれいにも、突風に驚いて柳の枝から飛び出した鴉まで描いてある。さてここまでは夏景山水圖としてはあり得る圖柄である。

ところがこの山水圖には、一寸見ちよつとみには何氣ないものでありながら、よく見ると不可解な描寫がなされてゐるのである。それは網を手にして溪流の中の岩に立つ童僕の姿である（圖三）。文人隠士に童僕が



圖二 與謝蕪村筆「四季山水四幅對」の内「夏景圖」

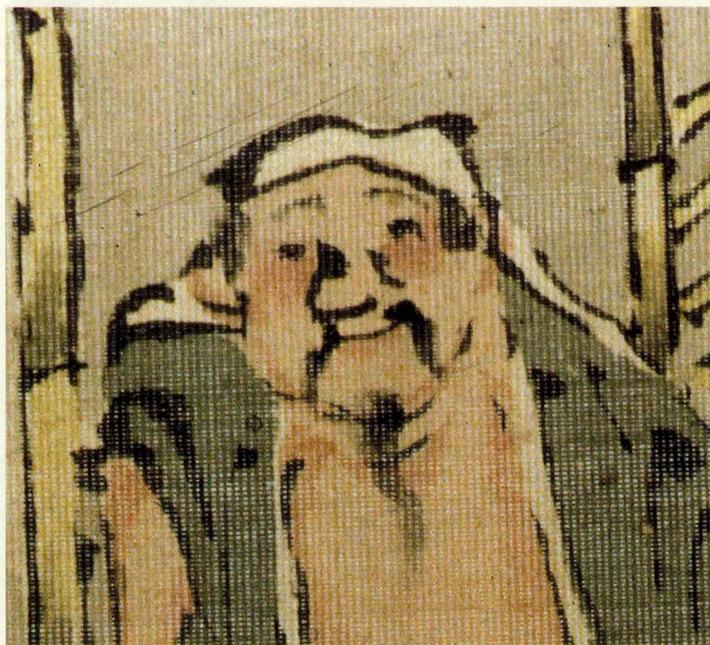


圖三 同「夏景圖」部分

付き添ふ圖柄は不思議でも何でもない。また山水畫に漁師が漁をする圖柄や高士が釣り糸を垂れる圖柄も珍しくはない。私がここで違和感を覺えたのは、童僕が溪流の中に入つて網で魚を捕らうとしてゐる姿である。この圖柄は何を意味するのか。端的に言つてしまへば、床から童僕を見やつてゐる文人隠士が命じたに違ひないのである（圖四）。肩まで袖をまくり上げ、胸はだけてくつろぐその姿を見てゐると、手元に描かれてゐる器が酒器に見えてくる。つまり暑氣拂ひに一杯やつてゐる姿である。さう思つて隠士の目元を見ると、うつすらと赤い代赭が施されてゐるではないか（圖五）。この圖柄を、文人隠士が暑氣拂ひの酒の肴を童僕に命じて捕らせてゐるところと見るならば、隠士の清雅な様子を主題とする傳統的な文人畫としては、誠に珍しい趣向と言はなければなるまい。

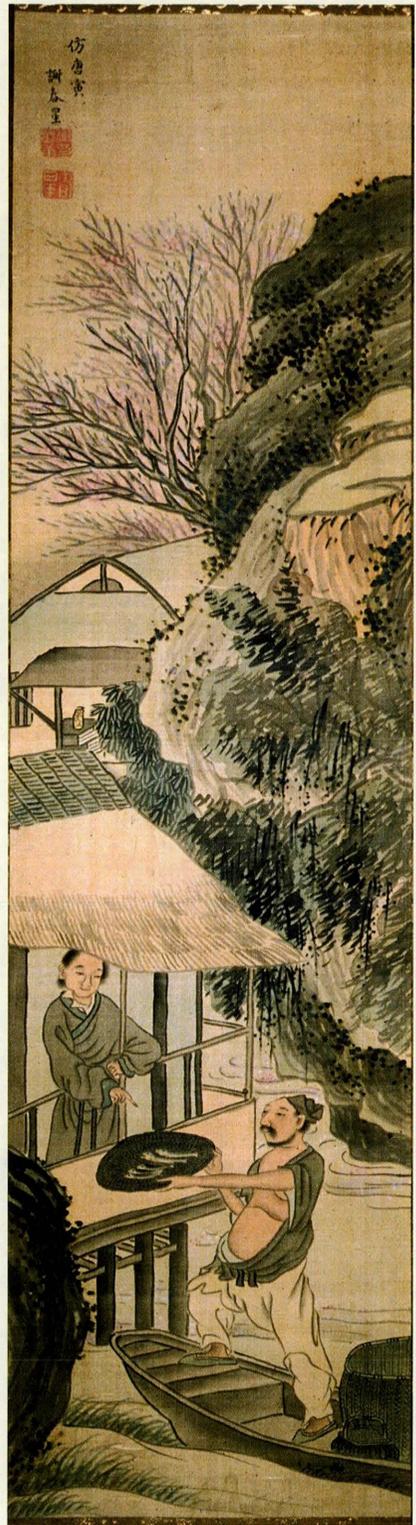


圖四 同「夏景圖」部分



圖五 同「夏景圖」部分

右の畫の内に文人の食への志向を讀み取ることが讀み過ぎといふ向きには、次の畫(圖六)を見ていただきたい。本圖もやはり山陰の隱士の茅屋を描いたものであるが、その焦點は畫面中ほどの童僕と漁師の對面場面にある。そこでは小舟に乗つた漁師が川魚を載せた笊を差し出し、川邊の窗に立つ童僕がそれを指さしてゐる。これは童僕が漁師から川魚を買ひ求めてゐる場面に相違ない。無論それは



圖六 與謝蕪村筆「春溪茅屋圖」

この童僕のためのものではなく、畫中には描かれてゐないが、この茅屋の主である隠士の食膳に上せるための魚に相違ない。本圖を描いた蕪村の狙ひが、隠士の清雅な暮らしぶりを描くことにあつたのではなく、日常の食事にまつはる情景を描くことにあつたことは、漁師が差し出す笹の上の川魚が、本圖にあつて最も緻密な筆致で描かれてゐることからも察せられる(圖七)。かうした描寫の裡には、雅俗の間に生きる文人隠士の姿こそ、眞の人間の生きる姿であるといふ、蕪村の文人觀が表明されてゐるやうに思はれる。數ある蕪村畫の細部を見ていくと、かうした蕪村の信念に基づいた描寫があちこちに見出せるのである。

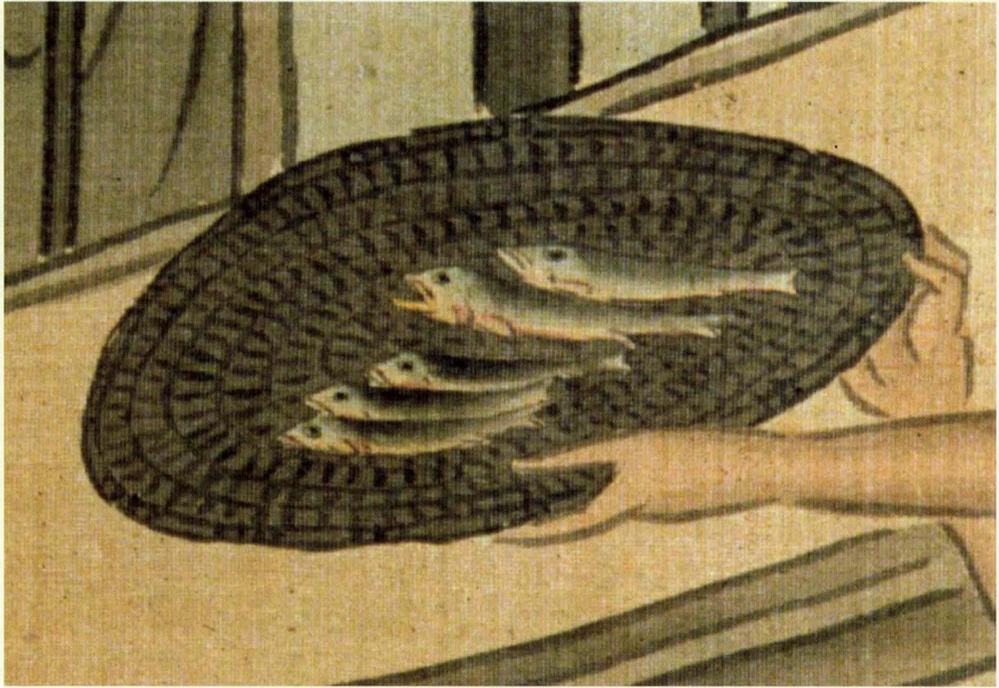
さて東瓦に當てた他の手紙に目を通してゐると、しばしば酒の禮を述べた一節にお目にかかる。そしてその禮の述べ方がまた如何に

も蕪村らしいのである。

美酒一樽、毎々かたじけなく候。樽此たび返却いたし申候。
又々御めぐみ所^{ねがふところ}希^にに候。
(安永四年七月四日付)

美酒一樽、御おくり被^{くだされ}下^にかたじけなく、ちよこく御めぐみ被^に下^に候様にと、已^{いらい}來^にたのしみ申事に御坐候。樽此たび御返却いたし申候。
(安永六年十一月廿八日付)

禮を述べるに止まらず、次の催促を忘れないところなど、如何にも蕪村らしい書きぶりである。かうした書きぶりを見てゐると、蕪村と東瓦の間では、世間的な遠慮などまつたく不用であつたことが判る。



圖七 同「春溪茅屋圖」部分

○
蕪村の手紙で最も多いのは、門人との間で交はされた俳諧に関するものである。門人に對する句評などは、本來率直であるべきだろうが、蕪村の句評の中には次のやうなまことに風變はりな手紙が遺つてゐる。

此間は御光來かたじけなく 辱つかまつるべく 奉レ存候。十六日句會、ずいぶん早く出席可レ仕候。

一、御句どもあまりはね不レ申候。

△竹護組出で曰ちくごぞみ やい、そこなあんだらめ。上手と云ふものハ常じやうぢやう 住おもしろい事斗ばかり はせぬものぢや。

此人の先達蚊遣火七せんたつてかやりびななくもん 觀音の狂言に河原のゐん（鹿）の當りは眼玉に入らぬ敷。

△頭取曰ちやうとり こゝはけんくわの場所ではござりませぬ。此御人おひとの又々案じ直して出らるゝ句を御（鹿）らうじて評判なされませ。

（下略）

五月十四日

春泥様しゆんでい

蕪村

この手紙は春泥が句會に先立つて提出豫定の句を書き送つてきたのに對して、蕪村がその句評として返したものであるが、一讀した

だけでは不可解な文面である。それはこの句評が芝居の役者評判記風に爲立てられてゐるからである。

まづ當名の春泥であるが、彼は京都の人で黒柳氏、少壮の頃江戸に出て古文辭學の第一人者服部南郭に漢學を學んで漢詩に長じ、歸京後、龍公美の幽蘭社に属して漢詩人柳宏として活躍した人物である。明和五年(二七六八)版の『平安人物志』には柳宏の名で學者の部に記載されてゐる。實は蕪村も江戸にゐた青年期に南郭の講義に列したことがあつたらしい。春泥は俳號であり、別に召波とも號した。俳諧の手解きは几圭から受けたが、几圭は蕪村が江戸で師事した夜半亭巴人の京都の門人であつた。當初は文人の餘技として俳諧を嗜む程度であつたが、蕪村が明和三年に京都で俳諧結社三葉社を結ぶや初會から熱心に參加し、後年は北野天満宮の西、等持院の近くに閑居して俳諧に没頭した。春泥は蕪村より十一歳年下であつたが、蕪村は平生から「平安にめづらしき高邁の風流家」と公言してはばからず、彼が四十五歳にして歿した際には、「餘三たび立て曰。我俳諧西せり、我俳諧西せり」と嘆き、「愚老半臂を殺がれし心仕候」と洩らしたのであつた(『春泥句集』序)。それほど蕪村は春泥に篤い信頼を寄せてゐた。さうした春泥への句評としてこの手紙を讀むと、單に役者評判記見立ての風變はりな句評といふだけなく、何か特異な意味合が感じられて來る。

春泥の書き寄越した句はこの手紙からは分からないが、蕪村は最

初に「御句どもあまりはね申さず候」と直言する。「はねる」とは芝居用語で「當たりを取る、成功する」といふ意。おそらくここで思はず芝居評語を用ゐたことによつて、蕪村は役者評判記爲立ての句評を思ひ立つたのではないか。最初の「△竹護組出て曰」といふ形式がまさしく役者評判記の常套であり、次に「貶と鼻屑」が登場することになる。

まづ「竹護組」の竹護であるが、竹護とは東武の人で、當時京都に上り嵯峨の地に寄寓しながらしばしば夜半亭の句會に顔を出してゐた俳人である。その竹護を頭にした竹護組を仮想して貶役と鼻屑役を割り當て、いきなり貶役に「やい、そこなあんだらめ」と悪たれ口をきかせてゐる。「そこな」は「そのの」といふ意。「あんだら」とは京阪地方で今も言ふ「あほんだら」の縮約語で、愚か者の意。そしてすかさず「上手といふものは常住おもしろい事ばかりはせぬものぢや」と貶す。無論この評言は蕪村の評であり、なかなか穿つたものの見方を含んでゐる。常識的には面白くて何が悪いといふところであるが、おそらく蕪村はここで上手な役者の演技を思ひ浮かべてゐたに違ひない。役者がいつもいつも觀客の目を奪ふやうな藝をしたなら、いかな鼻屑の客でもしまひには麻痺するであらう。いくら人目をひく藝ができるからといつても、上手はそれを連發すべきではないといふのである。ここで蕪村は役者と俳人、芝居と俳諧を同様なものと見てゐる。といふことは、蕪村にとつて俳諧とは、

一句一句單獨のものではなく、人生の流れの内に刻まれる一連の律動の如きものだったといふことであらうか。

そこで鼻貞が出て来て反論する。「此人」とは無論春泥のこと。

「先達蚊遣火七観音の狂言」といふ科白は、先月四月十八日に八坂の「七観音院」で催された月例会の兼題「蚊遣」に對する春泥の句を、芝居の外題風にもぢつたものである。その句會には蕪村をはじめ、春泥・竹護・太祇らが出席してゐた。「河原のゐんの當り」とは、當日の春泥の句「世や移り河原の院の蚊遣哉」が句會で評判になつたことをいふ。「河原の院」とは無論、平安初期に賀茂川の六條河原にあつたといふ源融の邸宅のこと。源融は嵯峨天皇の皇子でありながら、初めて源姓を賜はつて廷臣となつた人で、天皇の寵愛を一身に受けて華麗な生涯を送つたと言はれ、河原の院はその象徴とされて世に河原左大臣とも稱せられた。河原の院には松島の鹽竈の景に擬した庭を造り、毎日難波から鹽水を運ばせ、鹽を焼いて煙を立たせたといふ。春泥はその贅澤な鹽燒の煙を侘しい蚊遣の煙に轉じて見せたのである。この句は句會で評判を得たが、確かに人目をひくやうな「おもしろい句」ではない。言ふならば、蕪村が推奨した蕉翁の「さび・しをり」を漂はせる句柄といつていい。蕪村はかうした句調を春泥に期待してゐたのである。

貶と鼻貞の遣り取りの後、「頭取」が出てきて判定する。これも評判記の常套である。頭取とは芝居の興行を統轄する人のことで、

ここでは蕪村自身がその役を引き受けて仲裁に入る。その言に難解なところは無い。要は十六日の句會には別案を用意して出席するやう、暗に要請してゐるのである。

蕪村の評を平語で言ふならば、「今度の句はどれもあまり感心しないよ。いつもいつもこれ見よがしな句作りではないけない。君にはこの前の河原の院のやうな句も作れるではないか。もう一度案じ直してみてはどうかね」といふところであらうか。蕪村は「高邁なる風流家」春泥の才氣と技倆を十分認めながらも、常に人目をひかんとする句作りを誡め、俳諧の奥儀を早く悟つて欲しかつたに違ひない。そこで生真面目な春泥の氣質を配慮して、蕪村は敢へて役者評判記といふ滑稽な躰裁に託して忠告したのではあるまいか。

この手紙が書かれたのは明和八年（一七七二）五月のことであるが、その年の暮十二月七日に春泥は忽然としてこの世を去つた。その時の蕪村の嘆きの程は先に記した。時に春泥四十五歳、蕪村は五十六歳であつた。ひよつとしてこの時、蕪村は春泥の餘命を直感してゐたのかも知れない。

○

蕪村の芝居好きについては、田能村竹田の「屠赤瓊瑣録」（文政二年・一八一九年刊）にたいへん面白い逸話が紹介されてゐる。

蕪村の畫の門人に田原慶作と云ふ者あり。一夜初更後に蕪村を

訪ひしに戸を固くさしたり。慶作の意に、これは例よりは格別に早く寐に就かれたりと思ひ伺ひ居たるに、内にてはばたくと物音して何やら叫ぶ聲しければ、此は恠しき事なれば、とくと聞かんとて戸をほとほと叩きければ、先生の聲にていらへして戸を開きたり。入りて見れば、家内に一人も見えず。奥の間に箒ごみ打の類取散らしたり。先生にいかにと問へば、蕪村いふ、今宵は妻は娘及び奴婢を具して親里に行きたりと對ふ。扱て今のはたくと音のせしはいかにと問へば、此内芝居を見しに、芝耕といへる好者の藝いかにも感心せし故、今宵は幸ひに一人故、門をさして其まねするなり。されども何分にも似ざる故、幾度も試みたりと答ふ。かかる洒落の人物なりしと也。月峰上人の話なり。

田原慶作なる人物については、蕪村の畫の門人とあるが不明である。一方、田原慶作の話を傳へた月峰上人は東山の雙林寺の僧で、池大雅の門人となつた畫僧である。蕪村歿年には二十四歳となつてゐたから、蕪村とは直接の交流はなかつたにしても、その人柄についてこの風評を耳にすることは十分あつたであらう。

月峰の話はいかにも蕪村らしい逸話である。芝居好きが役者の聲色や所作を真似て楽しむことはよくあることだらう。しかし家人の留守を幸ひに、箒やはたきを持ち出して、行燈の明かりの中で一人

芝居の眞似事をしてゐる蕪村の姿を想像すると、どこかユーモラスな感じさへ覺える。しかも單にお遊びでやつてゐたわけではなく、「何分にも似ざる故、幾度も試みたり」といふやうに、あくまでも本氣だつたのである。この逸話の勘所はここにある。つまり蕪村といふ人は單に頭や眼の人ではなく、自らの體を以つて感じ取る人だつたといふことである。

このやうに蕪村の芝居好きは周圍のよく知るところであつたが、次の手紙は安永八年(二七七九)の正月興行を觀た蕪村が、門人几董に當てたと推定される役者評である。何も知らずに讀めば、芝居好きの粹がりの放言のやうにも讀めるが、右のやうな蕪村の芝居への打ち込みやうを知つて讀むならば、その讀み方も變はつてくるであらう。

此間は御物遠に候。春暖にてころよく候。さて此間南側(南座)見物いたし候。山三狂言(出雲阿國と名古屋山三の演目)の取組近年の作にて、よし男(中山文七)も又是迄之出來(これ迄で最高の出來)と存候。さりとは前後の狂言大くそにて、見所無之候。おしき事に候。前後を添削いたし候て見申度ものに候。奥山(淺尾爲十郎)例のごとくさしておもしろき事も無之、只見え一通り也。舍柳(中山來助)は甚あしく候。伊八(中山猪八)大ていにいたし候。其答(澤村國太郎)むすめ悋氣之段、はじめ

は能候。後に至りては甚むさく候。甚吉（山科甚吉）さまでの見所なく候。口山（浅尾豊藏）は例の小芝居、一向取るに足らず候。多藏（中山多藏）殊外赤下手にて候。先づよし男一人外に見るものは無し之候。しかし何にもせよ花やかにて、二ノ替（正月興行）光景にて候。とかく近年狂言作者大赤下手にて、下手のはいかい師の點取句を見る様にて候。何事も貴面御ものがたりと書留候。（下略）

正月廿五日

夜半

役者一人一人に對して實に直截かつ直感的な評を下してゐるが、そこに芝居好きの粹がりなど微塵も感じられない。その口振りには芝居と一體化した者の肉感的ともいふべき實感が籠もつてゐる。そして最後に、「とかく近年狂言作者大赤下手にて、下手の俳諧師の點取句を見る様にて候」と述べてゐるやうに、蕪村にとつて芝居も俳諧も同斷だったのである。手紙の中の評言を拾つてみても、「見所なし」「見え一通り也」「小芝居」といつたやうに、どれもそのまま發句の評言としても十分通じる。

では、蕪村の言ふ「見所」とは如何なるものか。奇しくも右の手紙で「甚あしく候」と評した舎柳について、三年後の天明二年十一月の手紙（几童當）で次のやうに再評價してゐる。その評言が蕪村の

言ふ「見所」の勘所をよく示してゐる。

顔見せ御見物のよし、愚老も昨日佳業（若い門人）催にて見申候。今舎柳甚おかしく、さりととは色事師のいやみをすて候て、さくくといたし候所、甚荷擔に候。

この時舎柳は「五説經末廣系圖」の小栗判官役を勤めたのであるが、蕪村が今回の藝を評價し「荷擔」したのは、「色事師のいやみをすて候て、さくくといたし」だからである。すなはち蕪村は色事を得意とする役者のこれ見よがしの聲音や所作を嫌ひ、雪を踏むやうな小氣味のよい藝を評價するのである。「見所」とは難しいもので、見てほしい處を強調すれば「嫌味」になるし、「さくく」といたし「てばかりだと」「見え一通り」になつてしまふ。蕪村は「やじろべゑ」のやうなバランス感覺を要求してゐるのである。

さて舎柳を褒めた後、この手紙でも蕪村は次々と役者を俎上に載せてゆく。

扱又國五郎（浅尾國五郎）毒水があたりての身ぶりおかしく候。

東藏（中村歌右衛門）は始終九太夫（假名手本忠臣藏）の斧九太夫、軽い適役にて、横山或は三庄太夫（極惡の適役と申ものにて無し）之候。三庄太夫などは同じおやぢでも大に仕内（演技）有し之物

にて、威儀も無し之候てはあしく候。眠獅みんし(風雛助)はさんくにて、筒井半二(狂言作者)にも逢申候所、不出來狂言くやみ居申候。

次次に發せられる貶けなは、先の役者評判記のそれと同じ種類のものともていい。この手紙を受け取つた几董も、おそらく蕪村の俳諧觀を聞く思ひで讀んだことであらう。それほど蕪村の役者評は句評と通じるところが多い。

さて、このやうに散散役者の貶けなを述べ立てた後で、蕪村は當日の芝居小屋の様子を次のやうに報告してゐる。

しかしけしからぬ大入、昨日の棧敷さじきも漸やうやう 向ノ正面にて、小雛・小絲・石松(いづれも蕪村馴染みの藝妓)などにて見申候。佳葉は用事に付七ツ(夕方四時)過に見え候て、それまでは愚老山の大将、大見えにて大魯たいろ(門人で遊興好き)が胸中(大盡氣分)にて見物いたし候。高たかしの太夫(附)(御典醫高階太夫)なども見え候。是等も東ノ十四五間めにて見て居申候。しかし花やか成事共、まこと都の風流、田舎には又夢にも見られぬ光景にて候。春坡子(几董門、「大丸」の祖)なども御出被おいで成候よし、とてももの事に同日ならば一しほ入の佳興入と残念に候。

ここには當時の芝居の盛況ぶりとともに、その中で無邪氣に心弾ませ、その雰圍氣を心から樂しむ蕪村の姿がありありと窺へる。天明二年といへば蕪村六十七歳、翌三年の初冬にはすでに臨終の床についてゐたから、これが最後の顔見世見物となつた。

○ 右に紹介してきた手紙には、いづれも蕪村獨特のをかし味が漂つてゐる。蕪村獨特といふのは、そのをかし味が單なる洒落や冗談ではなく、蕪村の實生活の實感に根差してゐるといふ意味である。娘くのと口論や奈良茶飯の催促にしろ、鮎にまつはる忠告や役者評判記爲立ての句評にしろ、そこには蕪村の生活と嗜好が色濃く塗られられてゐる。蕪村のをかし味にはさうした蕪村自身のにほひが裏打ちされてゐると言つていい。といふことは、蕪村は自分自身を笑ひ得た人であつたからである。

良質の笑ひやをかしさといふものには、どこかに話者自身の體臭が匂ふものである。蕪村の手紙のをかし味とはまさにさうした性質のものであり、その書きぶりを眺めてゐると、自らの所行を笑つて見つめるもう一人の蕪村が、その背後からこちらを眺めてゐるやうに思へて来る。それが蕪村の手紙の文體であり、蕪村の生きた精神の姿ではあるまいか。